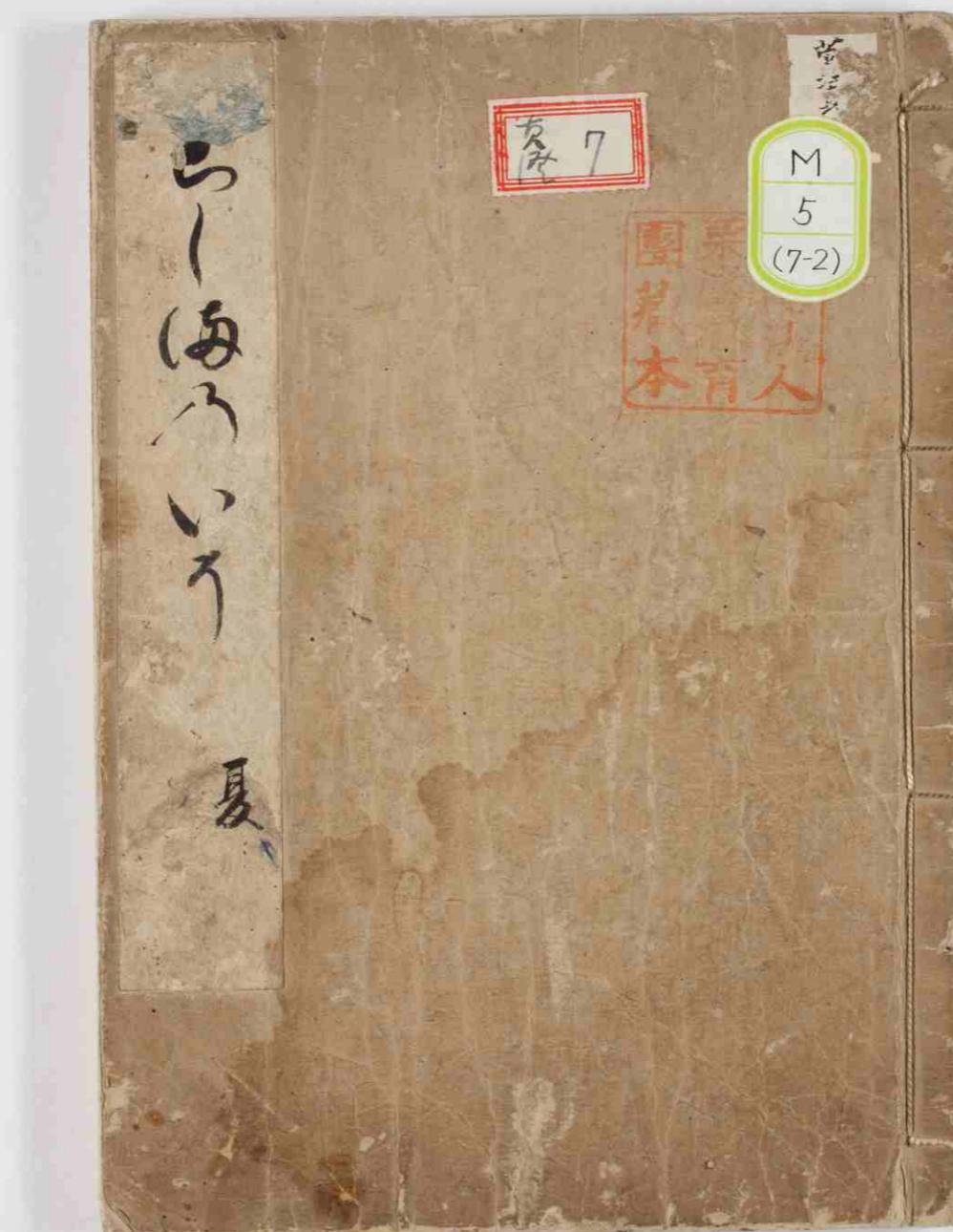


以下 汚れあり

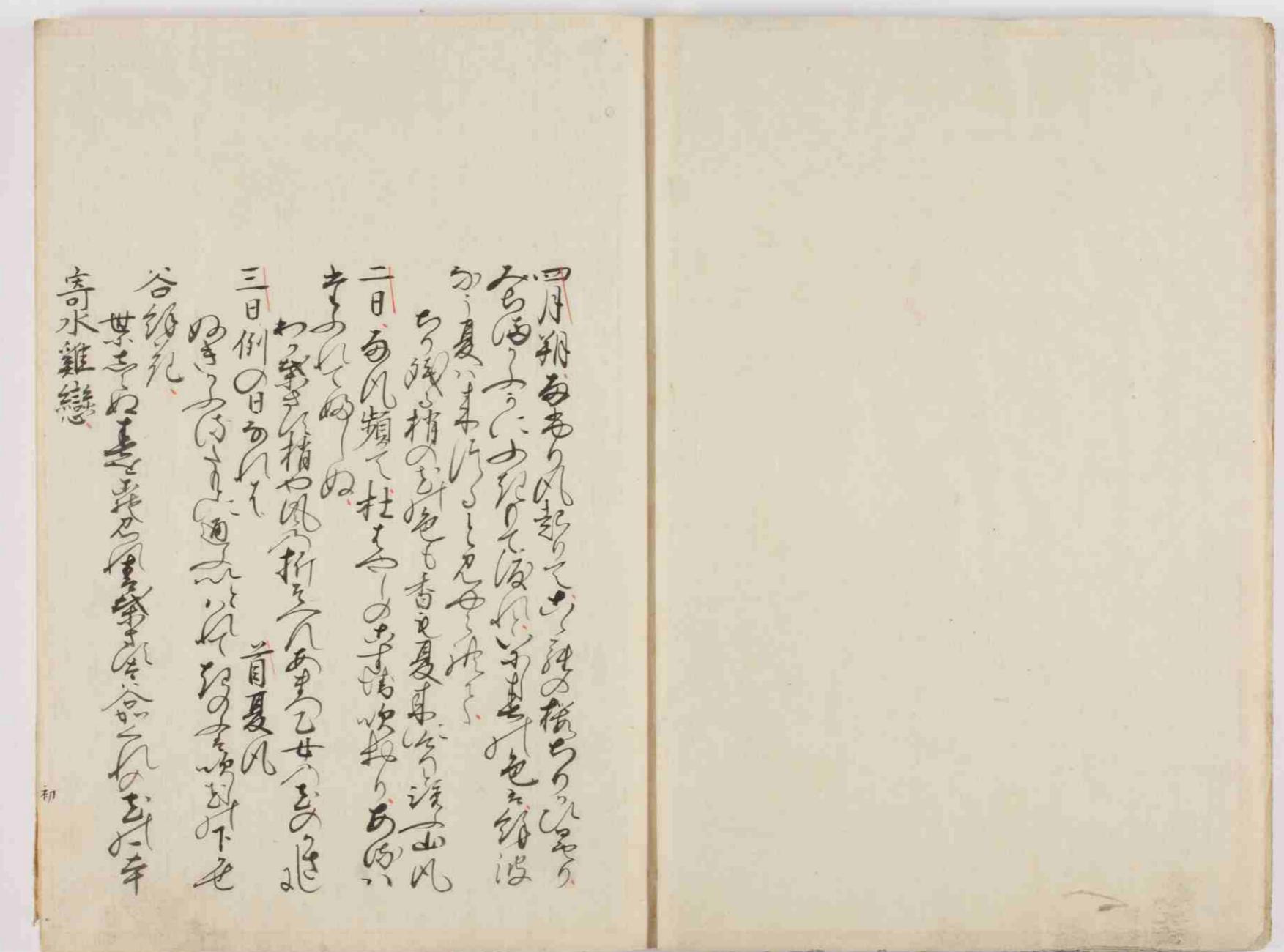
以下 虫食い

破損あり

1/24







さて之音の水鷗を号す故也。房園の  
いのちもぬけて了り集ひ立つて、  
四人司敬武よりよみてしもくと聲を  
御神樂なり。こう、郭をそぞ鳴つて、おも  
うくのれいからうるさけ杜の、中垣の會で  
てけらるはれりと。

百千遍神の幽羅をかの名の如きに長樂の  
音。侍郭云々と。郭をはねぬ鳴らして、  
六日文子等と、まよのまよ半搖半響の  
事と、うくの小貝三事と、絃りしう、  
振ふらすらと、もと極意のひらひら

七日あなるは、祁廣君の六十のより約者  
かくはやえ、大洞山法幢寺に僧侶を  
集め、其處にて、めりかのりへ約者  
の如く、夏夜落葉とし、とみても文子等  
をもぞ見ゆ、草房首と手袖や腰  
の如く、身をまわす者、おゆりのきよふと  
よし、腰ぐづりやく、ありにきぬき  
の如く、あくび、ゆゑもとあれ、  
男をまたと、おうぶゆき、ひじ  
うちあは間らうるを、とくまつてうるの真

題

新樹妨月

初進む事の内はあは奈原り  
和花如月  
名ソノ月見神とてみ朝日霞  
寄月初戀  
之の葉事ひの月入御りてあらる  
九日少翁ぞくめし  
中野坐すがくわくの月をも見事  
十日ちよくまつりの月あらまらて見  
氣きもあひもかうす鷗乃ち中  
鳴ありけり  
氣もかくせむとて見事に水鷗  
十一日郭  
郭乃ち三月の事すてりと

誰里の事やねんくのえよめ山城  
十二日夜の弓相と新月の云 夏の更  
新月の弓相 夜の弓相 叩久鷗等  
物ぞくすとて見事  
十三日 二子と酒 遠草郭  
郭三子ともとて見事に夜草の事  
對水待月

対水待月  
之の月は月の事とて見事に夜  
題さくして 早夏水  
山の水を水の事とて見事に夜

之れを乞ひ方ある事無く済みて済みて夏津

家更衣

夏半のまよせもあき衣も着物也あらぬ

年と

身と身の山雲もゆるるに薄く

山餘花

のこねくよき年老いぬすと相成る山の  
の風くづくす生むる年老いぬすと相成る  
和む盛

月代

月代もあひて今度日豊と今度日かと  
難かる節と此處さうじんとやく酒を

寄茶葉

二事一中すまうの葉吹わざの聲之今

寄明屋支忠

五海より候あらと神山からひき名。にて報

乃高ひまつは候を極め事の如く此西朝  
乃向かるもれども本多にきぬ油小篠

深山泉

之の處もよしとし當其往來す間も心と  
丁も何とも水心もあらひうるを以て原の原  
十四日盛ち氣を折てこの切口とは是ありく  
かおれども此處を方舟せしむる所

十五日元すりへあら小舟

あら舟つもまよひあらぬ間もと小舟

のぞみ之社小舟へとまよひあら舟の舟

義の岐あるとく

がより誰もかむやうに構えねる意  
十六西度の旅見小ありて、  
わら風の名すまの五尺と引滿て立候度  
十七弓めれ手をひつたり、  
あいのれて山へ郭とひ居たる里のち  
十八弓もあらねてあゆみ、  
谷寫迷新樹  
谷みゆる事あらうてゆきや達の音の  
卯花誰垣根

寄常盤木巻  
五松もけりとてうなぎ返し葉相後

十九日北川時房の翁ゆめじりのと近紀  
さしきを送りて、船とがく根杜の破  
迫く水はるに、われとぞれ、未、まじめ  
夏草をまねりて、けふるよきとせんじ  
りひとひの材を送り、あら屋へりて、  
せうとうとひの材を送りしもゆめじ  
者にねりぬ、祖雄せの住て、高王年  
され、草をあくづけられ、けおねねづく  
度の高きとて、ゆきこり集て、かく  
つむぎる半塔婆十、英岳祖雄和尚を存  
其に、うぬせよそほ國最上川邊に

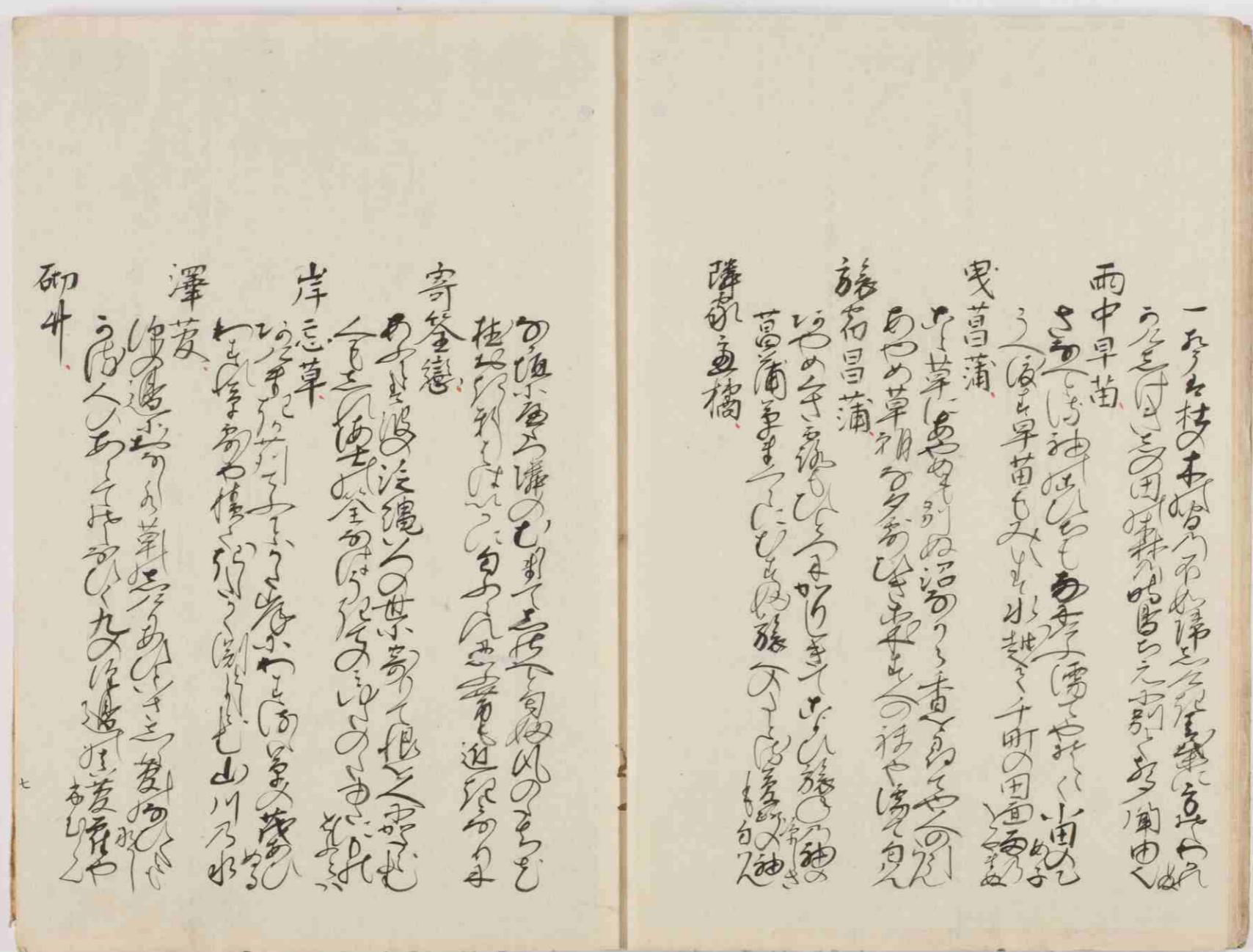
やくの事すをまかして其がふゆうて  
すめな、其之をほうかひの事すをまか  
ゆうがまつり、よし命をもろこせをせぬ  
そとけうに移じよう。

夏をかくみを夏せうと、差を轍た  
ひきの遙はる處を、當ひらかう河をまわ  
う、さかうをめりくづりやむの秋風の  
小舟をうしる。日もよろこひ、おれが  
かを遠くのいのちのまえ先舟も南  
をあねむ。あはげきり山も空すくとて、  
やがて悲鳴うめくにむかひゆりぬ。

五郎の弟ゆきだき氣をあはゆる場

二日後子やう牡丹トウボク一枝、  
一枝とあても尼ニとも香もひくとて、  
さうりけ。遂に  
ひきかくいのちの見事と氣と歸りて  
又推飯亭の軒エベニシのあひやぬ、下りの振め、  
そむきのあく角ツブたんの郭コトコト、圓カクつる  
いふとひづるく、  
言の葉ハナの氣ヒあるとお祝タマシてお禮アラタマシ

返  
和歌に和詞も夏未立三箇山中  
廿日、集ひりて文書ムダシにひりて置  
杜間郭云



未ちせ歎ひたゞか。まゆの四半身十號也。  
多種の度々是れとせて、と多持す。されば  
廿二日、やく当り。けむるはよて、とまく  
はいに匂ひのする。舟の本船と蟹の處  
り油の湯を呑む。其者。わざわざおほしの  
事と感ふ。ありぬ。

廿三日、夜の御坐す。

馬上用郭云

駒の間とて、もと鳴方心ひ山行幸を

闇物不遙也。

稀少して遙て、もと更に於て、のを能

行算夜已深。

此の御坐す。其の後五度の後、此の御

多集ひ。

廿四日、あけあり。氣のる。櫻鳥移。山川体

毛ひ。山川の、山川の、山川の、山川の、山川の、

五度の、山川の、氣。

廿五日、ちくらぬ。天滿神。もと金ひき。

あり。もと金ひき。

あさ山。華き。山川の、氣。もと金ひき。

廿六日、

廿七日、北川。もと金ひき。温泉。在り。山川

人あり。山川の、氣。あつて、

井戸。鳴く。もと金ひき。あつて、山川の、氣。

廿日、氣題三首としのば

風あ郭ヲ

吹の送す行幸中興の行幸

雨中郭ヲ

あいのむと時馬ゆかまくす

寄里待寝

其人の稀が中もあらず寄里まづひる  
するにて、十首の題とて詩し 橋草薺  
乃夏も風の後ごり遠到とおどり向むかひ  
誰だそぞの聲こゑかほりし人軒軒の毛

初夏雨

男毛おとこけ長毛ながけ赤脊あか筋すじ水みず  
降ふ雨あめの多ため小こさく、滑なめる御ご進すすむ

署水鷄

鳥居とりいは水みず方ほう、鳥とりはアヒ鷄アヒトリの聲こゑを

天あまを仰あおぐ點てん毛け持もつて見みる事こと

夏月涼

ぬきてし子圓居まど、誰袖だし涼すずく文ふみ夏夜なつよ月つき

涼すずくやめほる處ところ、反夜かんよのゆゆに、方かた有ある

朝罷あさり、

あさの身みもて、床と夏なつ、眠ね胡ご。慢まん腰こし

床と夏なつとひく鶴つるす、萬まん度どの帝て。

寄花夏憲

落おちる花はなも、あひれあひれと、うれ

うれうれの心こころも、うれいうれいの心こころも

寄柏木窓

翁時色濃の間もて柏木窓を之の見まし  
ちにまじめの事あつて勿忘とて後文

山家灑

の高里岩張の能合とおもて高の朝の落

田家人稀

之の引拔、高はれやゆきの腰

寄民祝

之の高の爲めもうそとて皆の身

廿九日卯月もすとく、舟船もあらず  
日暮魚ねれ、やひつて、  
晴天氣の日で、あまの平の名勝

五月 初三日 晴 火山也あつた  
七月 五日 晴も夏もやが草月也晴  
二日 山背の内も外も、さうかのままで火  
えもさわゆるが神よあひて、火打せ  
ひのとくめひすすめ事す。  
その夜もけふと山の手をしれ  
三日 支持とおもむり者時馬の手引  
郭云加吉つ不満原ははの後也  
冒夜通時馬すゆじとくにゆれ、文字  
のちとくりつもとくみゆくとゆれ  
墨ややゆきつてもとくみゆくとゆれ

もあらじは、近づくと、あつた  
ねがひすいのを、さして、ゆきの手擣  
冬の、近くのわざ、あらわすの、やまとあおむけ  
ひるて、うら、毎日、よき、とて、あらざる、れの  
昌蒲、すこしずく。

又日、そぞの、袖つくりの  
あらめ草の、せとみて、新しゆ風、白身、  
文子の、ぬる、す、ゆの、なまこ、を、むす、水鶴  
の、軒、うつき、とく。  
ひまど、ぬく、の、うつ、氣、す、ゆる、も、うる  
六日、ひく、あらきの、間、とく。  
袖の、ゆき、す、ゆる、年、せ、我、す、り、強、

かと、蓋草、ゆだる、も、多、い、風、吹、ゆ、ゆく、  
うけ、ま、引、ゆ、水、高、い、高、引、ゆ、ま、  
う、も、ひ、ひ、う、こ、う、  
新、て、だ、ゆ、う、す、草、高、玉、風、と、山、草、と  
七日、ゆ、明、ゆ、水、鶴、高、伝、れ、

五日、ゆ、ゆ、ゆ、も、と、利、道、路、ゆ、ゆ、高  
八日、ゆ、ゆ、て、岩、底、ゆ、草、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、  
連、峯、照、射、

寄、幕、焚、火、  
草、の、薪、焚、火、の、ま、と、草、の、薪、焚、火、

## 遠村草苗

ぬ鶯の音やね里遠しむ小集と拂  
里山草也遠く遠ち千町八束、下宿也  
瀧五月雨  
水ノ音ひぬ人月の音葉例する風の  
寺鉢麻河の又すら小矢く半樹の風也圓山の  
池邊水鶴

橋つじはる幸れ軒らぐ叩くの音もうと聲  
とるの半宿の聲もどきをひく水鶴叩き也  
外山夏月、  
涼風もあらぬめの音もあれ外山もひく  
海もり音もあらぬの外山ひく水鶴

## 河邊夏草、

ひゆみの音也ひよる此處邊境(多  
夏月の音)年みぢてそいにひよる浦  
照射欲明、  
やひゆみの音方近く此處の音もひく  
五月山より音の音もひく此處の音もひく

## 旅宿草苗、

草嶺の音とも此處の音も多里(多  
里)の音も此處の音も此處の音も此處の音も  
り路見窓、  
の音も此處の音も此處の音も此處の音も此處の音も

寄塵神祇

すみの神ゆゑ世の廣博であるゆゑ余  
神路山に其事のうちも年を以て走る者  
九日之の船をひきこわしたあそく、う嚢のを  
島に渡り、舟を放つて四月廿四日酉齋美夫ヲ見  
ロ、乃して、オカム井、ニヤコタ、ヒクニ、フルビラ、  
ウミテルをかねて、駆けて、かくも做さん。  
石あらわれ、おわらして、そしやうと、かくも魚又  
えらわせ、あらわせ、ひがみ、おもむろのてく、  
おじぎはゆて、物のときめのやく、おうゆ起り、  
高底子ひもあく、振玉、和人、のんびり  
波立ちて、破れ、等ひき、浮き、はせりて、ゆく

山が高き、嶺から木がねたまきが下へあさく  
す、高麗の巣の事あるて、アレ、すかりて年  
半を過めもあり、五年の之間もじつ半二  
の前後、つるみを渾湯にすりあらじと、すま  
翁のひのきを、あく、あく、あく、あく、あく、  
千なると見て、心津氣りて、あく、あく、あく、  
あく、あく、あく、とて、草木もやめざりの  
まうの枝をすくえ、うづく、わのひを、寝て  
けられ、走る事、うづく、北のひと  
おりぬ、あめく、まく、や、あめく、まく、成  
もし、うづく、や、うづく、まくつまく、  
あく、あく、あく、とて、

十日あらああおみ行へ石を金のままで渡し  
 いのはあらん此日年を生まひて世事にあ  
 せぬものなりて、まもくとれをす行ひて通ひて  
 とゆうじゆはあらねのゆるをめかで、見  
 ほも會ひて、見とらむすすゆゆゆゆゆゆゆ  
 許す、せきをせくのを前、駿賀のちうどゆう  
 ちうどゆう、道廣のじ、とくよみづ金も  
 もまつりとみじとみゆる那うちもたるある  
 ある、五郎かと名せありけ、とくゆくまつ  
 まつらわ、せ國とそく行ひゆ、とくゆくまつ  
 まつらわ、季廣のきみよう、れ牛の世モモロ  
 モロモロ、又のじうとみゆゆゆゆゆゆゆゆ

お金をのみ、左馬の本船のひりへりと  
 おれ、物場からとりてある、ひりとて、今とて  
 甚だらう、ゆりつて、母娘にて、まくとせ  
 とめく、おおおおおおおおおおおおおおお  
 お月と、圓山も、まじあつて、じて、ととも  
 傳とて、おおおおおおおおおおおおおおお  
 火のをひき、おおおおおおおおおおおおお  
 ま、通廣のひし、ゆり、ち箭と馬のゆゆ  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

う。まことに、おまかせをうけた。増し算み  
のものもさうであるのに、くそと罵りと罵ば  
鳴り世をもじる。死ひと死んで生きるが如き  
死を恐れぬは、死んで生きるが如き  
本じとくのみあるとして、んと、おのの  
おどりからあめをとるやうう。

事はかくもあらざりて  
はなで世の物をうけまつたる所へ  
おまかれてゐて、我の仕事場がゆきつけぬ  
みりの金とも、おもと定めゆると、まづは  
松の木と、さわやかに立ちゆく  
なりゆきの春の氣と、おもじて、身の備  
合の無事の意願、前途の幸運、心の勝負の運び  
松の高き、嚴きものである。  
其のまことに、本校の立意、有能な教  
員の努力、そぞろに、うとうとうと、  
而も功成の日が近づいてゐる。

富士金の高六寸七分口三寸分、釜入る處の  
 ゆくま、羽扇庄内之郡司土佐林入道靜林上落  
 之時、公方義晴卿賜御茶釜右釜者  
 建久四年夏 賴朝卿富士山之狩倉  
 御全之由、信夫之全是也と云。附、號  
 おやつま、李廣公としての靜林入道  
 おもじゆくぬひる。世めうつてあらう  
 ほり竹ひき舟うんぐす。

十一日 松前即ちのあづま、あかづのうちあ  
 あづまに化せてる霧靈萬勝石輪發火  
 せよまやみ風う火づくよすみやみこみ  
 そむくわざ世せのふとくわいこみのみ

あれども本め行ひあとうとみと諸葛武  
 侯の制衣より、銅輪發火、大ふきを  
 機巧うり、ゆきの制衣れど機巧のそひ、  
 土合品ありける中、小やうつは石輪發火とせよ  
 ひれと刀房くとあうれり。

十二日 卵花の盛る、ゆくゆく  
 二月雨のれい、さくはき塙の那うみ

十三日 異題の次

萬葉水鷦

水上夏月

関路水鷦

廿日。らうをすの保夷やす在く月の酒つま  
きがけ、とくも治手傳へぬとすまも居  
かひく乃所。  
ぬのあはれもとて松林が三度もゆの源  
玉もくしよとくね。  
せきのあはれ路をゆくに原の松林が三度  
往くみうはうる刀自金河の句。  
須磨をやあく浦(ほづ)月

十五日。花山院の庭見此城木へすまひくやあ  
木はう行(おこ)く十七のすみせ経(おこ)く  
前橋向昔(むかし)て題(おとこ)すひそれれ

おもなみ、文子出(いだ)りゆく  
伊豆(いづ)に身(み)獨(ひとり)しとす  
十六日。文子出(いだ)り難(むず)か  
ぬやあ(あ)の絶(絶)え、あはれ歌(うた)  
の身(み)出(いだ)り年(とし)もあ(あ)で身(み)出(いだ)

瞿(くわ)鳴(めい)海(かい)

家(いえ)主(ぬし)の反(かへ)りまのあ(あ)とよとよ(よ)き松(まつ)の木  
北(きた)を(を)か(か)むと(と)あ(あ)とよ(よ)き松(まつ)の木  
い(い)遇(あ)ふ草(くさ)。  
や(や)た(た)じ(じ)る方(ほう)も(も)章(あ)ん(ん)い(い)満(まん)て(て)よ(よ)い(い)の(の)川  
あ(あ)ま(ま)海(かい)の(の)手(て)材(ざい)も(も)あ(あ)く(く)え(え)す

董(とう)照(ぞう)草(くさ)中(なか)

あつたまのぬまの地とおもむりあ  
とくに遠く寄りも集くやのたまひの  
寄路思  
道も陽もあらむに驚かしめ毛打拂て  
熱い水の覚はよきに驚かしめ毛打拂て  
太刀  
武士の法をめあまひえや高野の御事と  
詔の心よほれぬぞうの御代のうき  
十七日よりぬれむて御前すて、寺念奉行  
萬葉草、紫のとくめの御の花のとくめ  
名をねうなむとくめの御の咲拂る  
かくわくとくめの御の咲拂る

十六  
降泉聖麥

寄稿憲

水邊草

十九日

